

エレキ・ギターのサウンドはアンプで作れっ！

Marshall編



「ギター・アンプ」という名の通り、エレキ・ギターの音をよりエレキ・ギターらしい音にするためのアンプがギター・アンプです。エレキ・ギターのサウンドづくりにはエフェクターを使うなど、いろいろな方法がありますが、まずはギター・アンプの基本を理解して、ギターとアンプで良い音が出せるようにしましょう。アンプでの音づくりの基本を理解できれば、いつもと違うアンプを使う場合でも自分のサウンドを作ることができます。では、ギター・アンプの仕組みや使い方の基本をマスターしていきましょう！（文：鈴木健治）

アンプには3種類ある

Marshall（マーシャル）はFender（フェンダー）と並ぶギター・アンプ 2大ブランドの1つです。ギター・アンプには大きく分けて、真空管を使ったチューブ・アンプとトランジスタを使ったソリッドステート・アンプ、そして、近年益々進化を続ける、DSPを使ったモデリング・アンプの3種類があります。

今ではギター・アンプが高級オーディオ機器でしか見かけない真空管アンプですが、その温かみのある独自のサウンドには何ものにも変えられない魅力があり、ギター・アンプの世界では今でも多く使われているんです。その反面、定期的なメンテナンスが必要だったり、スイッチの入れ方など、使い方に注意が必要なおもあります。一方、ソリッドステート・アンプは一般的には壊れにくく、チューブ・アンプのような定期的なメンテナンスはあまり必要ではないのですが、サウンドの傾向はやや冷たい印象のものもあります。これはあくまで一般論で、一概にすべてのソリッドステート・アンプがそうだとは言えません。そして、DSPを使ったモデリング・アンプ。これはテクノロジーの発達によって生まれた比較的新しいタイプのアンプで、真空管を使った回路を擬似的に再現して、あたかもチューブ・アンプであるかのようなサウンドを出すことができるほか、現在では入手困難だったり、とても高価な部品をシミュレートして低価格で再現することができる、いわゆるバーチャルなアンプです。

ロックの代名詞、マーシャルアンプ

現在のようにたくさんのアンプメーカーが世に出る以前はロックと言えばマーシャル、マーシャルと言えばロックと言えるほど、まさにロックの代名詞であるマーシャルアンプ。その攻撃的なサウンドやスタックアンプに代表されるルックスからもロック・ギターにはマーシャルアンプがとても似合います。ジミ・ヘンドリックスやリッチー・ブラックモア、エリック・クラプトン、エドワード・ヴァン・ヘイレンなど、伝説のロック・ギタリストの背後には、必ずと言って良いほどにマーシャルアンプが鎮座していたものです。今でも引き継がれているマーシャルアンプにはやはりロックが似合いますね！

基本サウンドはアンプで作ろう

エレキ・ギターを鳴らすためにあるからこそこのギター・アンプ。まずはギターから直接アンプにプラグインして、そのアンプの基本の音を確認しましょう。ギターとアンプだけである程度良い音が出せなければ、いくら

エフェクターをつないでも良い音は出せません。逆に言うと、ギターとアンプだけで良い音が出せれば、エフェクターを使って彩りや迫力を加えたり、音を整理したりすることがより効果的にできるのです。まずはギター・アンプの使い方を理解することが大事と言えます。

JVM-210Hを理解しよう

今回紹介するマーシャルJVM210Hもそうですが、ギター・アンプにはクリーンチャンネルやドライブチャンネルというように、基本サウンドを切り替えられる数種類のチャンネルがあります（チャンネルが1つのアンプもあります）。例えば、曲の中でクリーントーンとドライブトーン、さらに、ギター・ソロではリードトーンを切り替える必要がある場合、アンプにチャンネルがなければ必要なサウンドの数だけアンプを並べなければなりません。実際、それはかなり困難なことですよ。そんな時にアンプ自体のサウンドを切り替えられるチャンネルがいくつかあれば、1台のアンプのチャンネル切り替えで多彩なサウンドを出すことができるんです。アンプにいくつかのチャンネルがある時は積極的に使い分けののが良いでしょう。

つまみを理解しよう

JVM210Hは大きく分けて3つのセクションで構成されています。まず、マスターセクション。ここではアンプのチャンネルにかかわらず、全体のサウンドをコントロールします。「MASTER1」、「MASTER2」（マスター1、マスター2）では全体のマスターボリュームをコントロールします。MASTER1、MASTER2を別の値にして、スイッチで切り替えることができるので、サウンドは変えずに音量だけ変えたい時に重宝するコントロールです。同じサウンドでソロの時は音量を上げたいような時に使しましょう。「RESONANCE」はアンプ全体の中低域の迫力をコントロールします。小音量でも迫力を出したい時にグイッと右へ回すと低音の迫力を増やすことができます。「PRESENCE」はアンプの超高音域のコントロールをします。後に紹介する高音域をコントロールする「TREBLE」よりも高い周波数をコントロールすることができます。

続いて、REVERBセクション。ここでは音に残響を加えるリバーブをコントロールします。RV D ODとRV D CLEAN/CRUNCHと「チャンネルごとにどのくらいリバーブをかけるのか」を分けてコントロール可能です。例えば、CLEANチャンネルではソリッドにリバーブを少なめ、OVERDRIVEチャンネルでソロを弾く時にリバーブを深めにかけて、奥行き感を足す...といった

使い方ができます。注意点として、リバーブも一種のエフェクトとも言えるので、かけ過ぎると音が奥まって、せつかくギター・ソロの音がボヤけて前に届かないケースもあるので、注意しましょう。

チャンネルを理解しよう

JVM210HはCLEAN/CRUNCHチャンネルと、OVERDRIVEチャンネルの2チャンネルで構成されています。さらに各チャンネルごとに3つのモードがあるので、3モード×2チャンネルで合計6種類のサウンドを出すことができるんです。また、マスターボリュームも2種類が切り替えられるので、多彩なサウンドを出すことが可能です。チューブ・アンプ1台でここまでいろいろなサウンドが出せるのはすごいことなのです。

チャンネルごとのつまみ

JVM210Hには2つのチャンネル別に設定ができるコントロールつまみがあります。チャンネル別にサウンドのキャラクターは違いますが、コントロールするつまみの意味は共通です。順番に説明していきましょう。

まず、左からVOLUME（ボリューム）はボリュームをコントロールします（そのままですね）。一番右にあるGAIN（ゲイン）は、これもある意味ボリュームの一種なのですが、主に歪み（ひずみ）の深さをコントロールします。このGAINで歪み具合を決めて、VOLUMEで音量を決めるのが基本的な使い方です。これはギター・アンプ共通の考え方なので、必ず理解しておきましょう。BASS（ベース）は低音域をコントロールします。MIDDLE（ミドル）は中音域をコントロールします。そして、TREBLE（トレブル）は高音域をコントロールします。サウンドの抜けの良さはTREBLEでコントロールすることが多いのですが、上げ過ぎると耳に痛いサウンドになってしまうので、「抜けは良いけど、耳に痛くないサウンド」を目指しましょう。実はこれは音づくりにとって、意外とキモだったりするのです。また、TREBLEなどに比べると一見地味な（？）MIDDLEですが、中音域はエレキ・ギターの核となるサウンドをコントロールするので、音を作る時には特に慎重に決めるようにしましょう。メタルなサウンドで、MIDDLEを下げめにするのは有効な手段の1つです。

多チャンネルなアンプでの音づくりのコツ

JVM210Hではまったく歪みのない綺麗なクリーントーンから、クラシックなオーバードライブサウンド、

各つまみの名称とコントロール



Marshall JVM210H 価格：215,000円（税抜）

- POWER 電源スイッチ
- STANDBY スタンバイスイッチ
- FOOT SWITCH/MIDI PROGRAM 各モードの切り替えをするスイッチ
- FX LOOP エフェクターのON/OFFを切り替えスイッチ
- MASTER 最終的な音量を決める
- RESONANCE 超低音域の調整をする
- PRESENCE 超高音域の調整をする
- REVERB 音の残響を調整する
- VOLUME チャンネルごとの音量を決める
- BASS 低音域の音質を調整する
- MIDDLE 中音域の音質を調整する
- TREBLE 高音域の音質を調整する
- GAIN 歪みの量を調整する
- CLEAN/CRUNCH クリーン、クランチのチャンネルを切り替えるスイッチ
- OVERDRIVE オーバードライブチャンネルに切り替えるスイッチ
- INPUT ギターからのシールドを挿す

ハイゲインなメタルサウンドまで多彩な音が出せます。モード3種類と、いろいろなサウンドを出せるのはとても便利ですが、音づくりしていて段々と迷って、わからなくなってしまふこともあるでしょう。そんな時は自分の好きなサウンドが聴ける音源を参考にして、そのサウンドに近付けるようにつまみをグリグリと動かしましょう。とにかくつまみはいじらないと、どういう風にサウンドが変化するかわからないので、その変化を体感して、耳で感じ取るようにしましょう。そうすることで、アンプのクセや「このつまみはこんな感じに変化させる時に使うんだ...」ということが理解できるようになります。そして、好きな音源とアンプから出る音を聴き比べて、なるべく近付けるようにできれば、そのアンプをかなり理解できたと言えます。何はともあれトライアンドエラーです！

聴く位置を変えてみよう

例えば、ライブの時にアンプの目の前でスピーカーに耳を近づけて聴く人はいませんよね。アンプのつまみを変えたら自分もアンプから少し離れて聴いてみると、アンプから出ているサウンドを客観的に聴くことができます。立ち位置によって、「思ったよりも固くなかった」とか「低音がモヤッとしていた」など、驚くほど聴こえ方が変わるのがわかると思います。これはスピーカーから出た音が空気を伝わって聴こえることや、部屋の残響音まで同時に聴けるからなのです。実際のライブ中に、客席で聴く音はこの音に近いのです。これはかなりオススメな方法なので、ぜひ試してみてください！

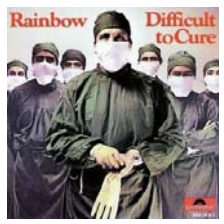
HISTORY

ジム・マーシャル 1923 - 2012

マーシャルアンプの創始者。1962年にマーシャル最初のギター・アンプ、JTM45を発表。多くのロックギタリストたちから支持される。当時はPA技術が現在ほど進化していなかったこともあり、ギター・アンプの大音量化が求められる中、12インチスピーカーを4発搭載したキャビネットをさらに2段に重ね、その上に100ワットのアンプヘッドを乗せるという、いわゆるマーシャルスタックはビート・タウンゼントやジミー・ペイジらの使用により一躍、脚光を浴びる。1968年、ウッドストックでのジミ・ヘンドリックスの伝説的なパフォーマンスはマーシャルアンプなしでは語れないほどの存在感を發した。現在もマーシャルアンプは最も代表的、かつロックなアンプとして断固たる地位を保っている。

サンプルセッティング1 | Surrender / Rainbow

ギタリストのリッチー・ブラックモアが在籍したバンド、Rainbowから少しポップな「Surrender」のサウンド。できれば、ストラトキャスターで弾きたいところですね。リッチー・ブラックモアの特徴として、シングルコイルのストラトキャスターでありながら、あまり高音がキツくなく、中低域は太いけれど、若干まるやかなサウンドが挙げられます。ここでは、OVERDRIVEチャンネルのオレンジモードを使っています。もちろんリッチーもマーシャルアンプを使っていました。



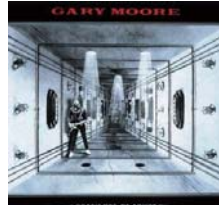
アルバム「DIFFICULT TO CURE」

OVERDRIVE チャンネル オレンジモード

MASTAR	RESONANCE	PRESENCE	RVB OD	VOLUME	BASS	MIDDLE	TREBLE	GAIN
0 10	0 10	0 10	0 10	0 10	0 10	0 10	0 10	0 10

サンプルセッティング2 Always Gonna Love You / Gary Moore

ゲイリー・ムーアのアルバム『大いなる野望』より「Always Gonna Love You」のサウンド。このアルバムでゲイリー・ムーアはレス・ポールとストラトキャスターを使って迫力のサウンドを聴かせてくれていますが、この曲ではレス・ポールにマーシャルという王道ロックなセッティングで、力強く泣きのソロを弾いています。名演！



アルバム「CORRIDORS OF POWER」

OVERDRIVE チャンネル オレンジモード

MASTAR	RESONANCE	PRESENCE	RVB OD	VOLUME	BASS	MIDDLE	TREBLE	GAIN
0 10	0 10	0 10	0 10	0 10	0 10	0 10	0 10	0 10

サンプルセッティング3 鈴木健治がオススメする万能クランチ・サウンド

ギターのボリュームをフルで、コードをジャーン！と弾くだけでも気持ち良いクランチサウンドです。ボリュームを絞っていくと、クリーンなアルペジオなんかもいけちゃう便利なセッティング。バックギングはこのサウンドで、ソロはOVERDRIVEチャンネルを使うのも良いでしょう。

CLEAN チャンネル 赤モード

MASTAR	RESONANCE	PRESENCE	RVB OD	VOLUME	BASS	MIDDLE	TREBLE	GAIN
0 10	0 10	0 10	OFF	0 10	0 10	0 10	0 10	0 10